えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑⑤

朝鮮半島由来 交流映す

伊予市猿ケ谷2号墳の陶質土器



伊予市猿ケ谷2号墳から出土した陶質土器（古墳時代中期）。手前中央の紡錘車の直径は4・4㌢

（県歴史文化博物館蔵）

陶質土器（とうしつどき）とは、4世紀以降の朝鮮半島で焼かれた硬質の土器のことで、三国時代と呼ばれる百済（くだら）・新羅（しらぎ）・加耶（かや）諸国から日本にもたらされた土器の総称である。

今回紹介する伊予市猿ケ谷2号墳から出土した陶質土器は、松山自動車道建設に伴い発掘調査された古墳の封土（ほうど）内からまとまって出土した資料だ。小型丸底壺（つぼ）、小型器台、高坏（たかつき）、高坏形器台、筒形器台、壺、甕（かめ）など十数点ある。

出土した場所は古墳時代後期の前方後円墳の後円部の墳丘内で、古墳時代後期に前方後円墳を築造するにあたり、前代にあった古墳を破壊したことが想定される。

陶質土器の小型器台と小型丸底壺は、これまでの朝鮮半島や日本列島出土品の研究では、日本で古墳時代前期後半に作られた布留式（ふるしき）土器を模倣して加耶で製作されたと考えられている。これらの陶質土器は、5世紀初めの古墳時代中期になり、対外交流の結果として、伊予にもたらされたものと想定できる。

また同時に出土した遺物に算盤玉形紡錘車（そろばんだまがたぼうすいしゃ）という糸を紡（つむ）ぐ道具も出土しており、渡来人と密接な関係を読み取ることができる。

現状では、これらの資料は朝鮮半島南部の咸安（ハマン）地域で出土する阿羅加耶様式の土器に類似しており、当地域と関連があったことがうかがえる。また、猿ケ谷2号墳周辺には、当時の最新技術である鍛冶道具を大量に副葬した猪の窪1号墳もあり、伊予市周辺が松山平野南部の対外交流の窓口であったことがわかる。

これらの陶質土器は県生涯学習センター人物博物館（松山市上野町）で7月5日まで開かれている「対外交流からみた古墳時代中期の伊予」展で、県内出土の陶質土器と共に展示されている。

（専門学芸員・冨田尚夫）

〈随時掲載します〉

掲載許可番号：d20230301-04